書き下ろし小説①

「ブエナ村駐在騎士の一日」

理不尽な孫の手

早朝、まだ日が昇る前に目が醒める。
隣で寝ているゼニスを起こさないように気をつけつつベッドから這い出て、ぐっと伸びをした。
服を身に着け、ベッド脇に置いてあった剣を手に取り、静かに廊下に出る。
二階は静かなものだが、一階からは人の気配がした。
階段を降りると、そこには一人のメイドがいた。
「おはようリーリャ」
「おはようございます。旦那様」
リーリャは早起きだ。ゼニスが起きるより一時間は前に起き出し、水汲みや暖炉の火入れなど、一日の準備をしてくれる。
元々は、これほど熱心なメイドではなかった。
能力はあったし、ゼニスより早起きはしていたが、それでも雇われメイドの範疇から出るレベルではなく、仕事は仕事と割り切っているように見えた。
仕事熱心になったのは、あの浮気騒動からだ。
彼女は、自分に責任があると思っているらしく、ゼニスやルーデウスに対して忠誠心のようなものを見せるようになった。個人的には、全面的に俺が悪いと思うのだが……まぁ、彼女にも思うところがあるんだろう。

リーリャは俺に挨拶をすると、仕事に戻った。
俺に背を向け、汲んできた水でテーブルを拭いている。
彼女が手を伸ばす度に突き出される尻はどうにも官能的で、見ていると朝っぱらからやらかしたい気持ちにもなる……が、我慢だ。
家の外へと出ると、日の出前のひんやりとした空気が頬を撫でた。
日の出前の薄暗い庭、昨晩は少し雨が降ったのか、庭の草花にいくつか水滴が残っていた。
少しばかり、足元がぬかるんでいる。
それを頭の片隅に置きつつ、剣を鞘から抜き放つ。
「……フッ！」
短く息を吐きながら、剣を振った。
大昔に教えてもらった剣神流の型を、一つ一つ確かめるように行っていく。
こうして真面目に鍛錬をするようになったのは、この村に来てからだ。
冒険者だった頃は、戦いの日々ということもあって、特に必要とはしていなかった。たまにギレーヌあたりに素振りや手合わせの相手として連れ出されることはあったが、少なくとも自主的に鍛錬をすることなどなかった。
ブエナは平和な村だ。
アスラ王国ということもあって魔物も滅多に出ないし、出てきても俺一人で難なく対処できる。
野盗の類だって滅多に出ない。このあたりで野盗をするぐらいなら、もう少し街に近いところでやるだろう。
たまに村人同士の諍いが起きたりはするが、所詮は喧嘩だ。
俺はこの村の駐在騎士として、そうしたものを治める義務があるが、剣も持ったことのないような村人の喧嘩を止めることぐらい、冒険者同士の殺し合いを止めるのに比べれば、赤子の手をひねるようなもんだ。

俺にとって、脅威となる存在が一切いない場所。
何もせず、昼まで寝て、日が出ている間はだらだらと過ごし、夜は愛する妻を抱く。
そんな生活が可能な場所だった。
となると、鈍るわけだ。腕が。
この村で暮らし始めてしばらくして、ギレーヌが俺に会いに来た。
その時に奴が言った言葉が「随分腕が鈍ったな」だ。
ギレーヌは、頭ってものの使い方を知らねえ底抜けの馬鹿だが、剣術に関しては一流だ。尊敬している。
そんな奴にそう言われて、流石にこれはやべえなと思ったわけだ。
もちろん、この村にいりゃあ、鍛錬なんぞしなくても、生きていけるだろう。
駐在騎士としての仕事は全うできるだろう。
冒険者時代は強大な魔物を何匹も相手にし、勝利してきた。
その経験には、それだけの重みがある。
だからこそ、俺は腕が鈍ることに恐怖した。今まで剣に頼って生きてきたから、それを失えば、この平和な暮らしや、愛する家族をも失ってしまうのではないかと危惧した。
だから、こうして毎日鍛錬している。
不思議なもんだ。十代の頃、師匠連中に耳にタコができるほどやれって言われてもやんなかったことを、自主的にやるようになってんだから。
とはいえ、ここまで熱心に鍛錬するようになったのは、ここ数年だ。
我が息子、ルディの影響だな。
あいつは今、城塞都市ロアでギレーヌに剣術を学んでいる。あのギレーヌの弟子だ。帰ってきた時に、かなりの腕前になっていないとも限らねえ。さすがに剣術で息子に負けるとあっちゃ、父親としての威

厳が保てねえ。
いずれ、追い抜かされるにしても、今じゃねえ。
「あなたー！　ご飯できたわよー！」
などと考えていると、家の方から声がした。
「おう！　今行く！」
いつしか、全身は汗だくで、シャツはぴったりと肌に張り付いていた。
ゼニスが起きて飯もできてるってことは、二時間ぐらい経ってたか。随分と集中してしまったようだ。
俺が二時間も真面目に鍛錬たぁ、かつての師匠連中が聞いたら目ン玉飛び出すだろうな。

つづきは、4月21日(水)発売のBlu-ray Chapter 1 初回生産限定版でお楽しみください。